

「いづれもいづれも誰にじも」

ガリ版はただの印刷機にすぎず

ガリ版がその役目をコピー機やプリンターに譲って数十年。その姿を見なくなつて久しいが、いまでも支持する声は消えてはいない。「ガリ版そのものを知らない世代にも響く温かい魅力がある」――。ガリ版文化史を研究する志村章子さんに聞いた。

ガリ版文化史研究者
志村章子

●しむら・しょうこ 1939年東京都生まれ。武蔵野美術学校卒業。『月刊 文具と事務機』編集部を経て、現在文筆業。94年にガリ版ネットワークを立ち上げる。著書に『ガリ版文化を歩く』（新宿書房）、『ガリ版ものがたり』（大修館書店）、共編著に『ガリ版文化史』（新宿書房）など。

人の想いと温度が伝わる印刷機

――いまやガリ版そのものを知らない人も多いと思います。ガリ版がどういう存在だったのか、ということころから聞かせください。

ガリ版――正式には謄写印刷といいますが、これが印刷手段として盛んに使われていたのは、明治末期

（一九〇〇年前後）から一九七〇年代までですね。だから小学校でガリ版（謄写版）を使っていたから見たことがある、覚えていて、という人は四十歳代ぐらいから上でしょうか。

いまのコピー機やデジタルプリンターが会社の部署やフロアごとに置かれていたような感じで、謄写版も会社や役所、学校などで広く使われてきました。手軽に刷れる印刷機と

いうことで、同人誌やミニコミ、ユースレターなどの制作にも使われていましたね。

学校といえば岩手県花巻市にある宮沢賢治記念館で見かけた写真に、賢治の教員時代の一枚があります。職員室の謄写版が写っている一枚で、しかも原紙が貼つてあったんですね。それを発見したときは、心からうれしくなりました。大正末の花巻農学

校時代です。髪を七三に分けた青年賢治。私のほうに歩いてくるかと思つたくらいです。

――志村さんは現在、「新ガリ版ネットワーク」という組織の首都圏支部の責任者としてどんな活動をされているんですか？

謄写版がワープロになり、現在ではパソコンで原稿を作つてプリンターで出力という形が主流になりましたが、現在でも実物があれば謄写版を続けたいという人はいるんですよ。私たちは、滋賀県を拠点に古い謄

写版を欲しい人にわかる活動を行っています。手軽な印刷として使用された「謄写版の時代」は、堀井謄

写堂から発売された一八九四（明治二十七年）年から、同社の後継会社^がが倒産する二〇〇二年までと考えると、謄写版の歴史は百年を超えるんです。次々に印刷機が変わりゆく中、謄

写版は長生きでした。シンプル構造の機械のようです。もしかしたら、まだ一号機も使用できるかもしれません（笑）。

――どういう人がガリ版に興味を持つんですか？

最近では、美術館などのワークショップで初めて謄写版に触れた二十〜三十代、美術表現の手段として興味を持つ人などです。

謄写版印刷に必要な道具は、ろう（蠟）原紙、ヤスリ、鉄筆、ローラー、インクなど。原紙は極薄の和紙にパラフィン加工をしています。ヤスリと呼ばれる鉄板の上に原紙を置き、鉄筆で文字を刻んだり、絵を描きます。その孔にインクをしみ込ませる

ことで印字する仕組みなのですが、この印刷技法は孔版印刷と呼ばれるもので、年賀状印刷で親しまれた家庭用印刷器の「プリントゴッコ」や

シルクスクリーンもこの技法を応用したものです。

ただ、ガリ版印刷は活版などほかの印刷手段と比較すると安価に道具を揃えられますし、シンプルな構造でとつきやすいものですから、幅広い年齢層に長く親しまれているのではないかと思います。

字の美しさだけでなく、文字の大きさ、字間や行間の調整、レイアウト、刷りの技術など、手書き原稿がそのまま印刷できるだけに作り手の想いや温度が伝わると思いますか、人間とのかかわりが深い道具だと思います。

ガリ版名人・職人がいた時代

――今回初めて「ガリ版名人」といわれる人の作ったものを拝見しました。あまりの字の美しさに驚きます。